

滞日日系ブラジル人の学校適応, 親子関係及び 地域参加に関するコミュニティ心理学的調査

— 同一地域の日本人親子との比較を中心に —

谷 測 真 也

(2009年10月6日受理)

A Research of School Adaptation, Parent-child Relationship and Community Participation
among Japanese-Brazilian Living in Japan:
Comparative Study with Japanese

Shinya Tanibuchi

Abstract: Since 2004, the author has been providing community psychological support for Japanese-Brazilian living in Japan. The purposes of this study were to investigate the association of school adaptation with parent-child relationship, and that of school adaptation with community participation. 60 Japanese-Brazilian families and 600 Japanese families participated in this questionnaire survey. Results were as follows: (a) Japanese-Brazilian children felt that parents were overprotective, (b) there were more parental expectation of children in Japanese-Brazilian than in the Japanese, (c) school adaptation of Japanese-Brazilian children were related to their recognition of parental love and their understanding of parental expectations, and (d) parents' participations in community and communication with Japanese parents were also related to school adaptation of Japanese-Brazilian children. These results were discussed in framework of community psychological supporting.

Key words: Japanese-Brazilian, parent-child relationship, school adaptation, community psychology

キーワード: 日系ブラジル人, 親子関係, 学校適応, コミュニティ心理学

問題と目的

親が就労目的で外国に移住した場合、親だけでなくその子どもたちも異文化適応上のさまざまな困難に直面する(関口, 2003)。外国からの移民の受け入れの歴史が長い米国では、移民の子どもの異文化適応に関する心理学的研究が盛んに行われてきた。例えば、子

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員: 兒玉憲一(主任指導教員), 前田健一,
岡本祐子

どもの異文化適応の関連要因として、社会的孤立や親子の文化的葛藤などが検討されている(Coatsworth, Pantin, & Szapocznik, 2002)。わが国では移民制度はないが、在日韓国・朝鮮人などの外国人の定住者は多く、近年はブラジル人をはじめとする南米人が就労目的で来日・定住しており、彼らやその子どもの異文化適応に関する精神医学的、心理学的研究も行われている(朝倉, 2005; 掛札, 2004; 宮坂, 2000)。コミュニティ心理学は、個人とコミュニティとの関係に焦点を当て、共同的・参画的な研究実践を通して、個人、コミュニティ、社会における生活の質を向上させるための方策を模索し実践する心理学である(Dalton,

Elias, & Wandersman, 2001)。米国では、移民の子どもに関するコミュニティ心理学的研究として、学校において適応を促進する心理教育プログラムの実践(Riggs, 2006)などアクション・リサーチ(援助しながらの研究)が行われている。わが国では、中国帰国者を対象としたアクション・リサーチがある。箕口(2001)らは、埼玉県中国帰国者定着促進センターを中心に、臨床心理士による直接介入やコンサルテーション、研究データに基づく介入と提言を行い、中国帰国者支援ネットワークを構築した。この研究成果は全国主要都市15ヶ所に設置された中国帰国者自立研修センターに広がり、地域を越えた“ネットワーク・コミュニティ”を形成しつつある。中国人、韓国・朝鮮人に次いで滞日者数の多い日系ブラジル人への支援体制は未だ整っておらず、地域におけるコミュニティ心理学的研究は杉岡・兒玉(2005; 2007)の研究が嚆矢である。

筆者の所属する研究グループ(「アミーゴ・プロジェクト」代表: 兒玉憲一広島大学教授)は、工業の盛んなある地方都市において地域ぐるみで行われている滞日日系ブラジル人(以下、ブラジル人)への支援活動に、コミュニティ心理学者として参加してきた。筆者らの役割は、心理臨床の訓練を受けた学生ボランティアとしてブラジル人児童生徒への直接的支援を行うことと、支援活動に密接に関連した問題について心理学的な調査を実施することである。

2004年から2006年11月までの「アミーゴ・プロジェクト」の活動とその成果については、すでに報告している(兒玉・伊藤・松岡・田村・杉岡・谷淵, 2006; 兒玉・倉地・栗原・島津・松下・杉岡・谷淵, 2007; 杉岡・兒玉, 2005)。また、2006年11月以降の活動とその成果については、稿を改めて詳細に報告する予定である。以下に、本プロジェクトの活動と成果を述べる。

まず、2004年にブラジル人成人対象の質問紙調査と彼らを支援する日本人支援者対象の面接調査を行い、この地域ではブラジル人児童生徒への教育的心理的支援がもっとも求められていることを見出した。そこで、2005年度に、広島大学地域貢献研究事業の研究助成を受け、ブラジル人児童生徒の教育的心理的支援をめざした、学生ボランティア、市教育委員会、民間支援団体の協働による学校外での「ピア・サポート(アポイオ・アミーゴ)教室」(以下、「教室」)を開始した。それと同時に、当時バラバラだった行政、学校、民間、大学の支援者を結びつけ連携するための支援者ネットワークを始めた。「教室」でブラジル人児童生徒から家庭や学校での様子を聞くなかで、彼らの学校適応、進路意識、親子関係が日本人と大きく異なるこ

とがわかり、その点を検討するため2005年12月に、大規模な質問紙調査(以下、2005年調査)を実施した(杉岡, 2007; 谷淵・杉岡・兒玉, 投稿中)。その結果、ブラジル人の親子の間にさまざまな面で心理的ギャップがあることが明らかになった。仕事が多忙で学校や「教室」にほとんど顔を見せないブラジル人保護者たちにどう働きかけるかが支援者の大きな課題になった。

2006年11月には、国際交流担当の行政関係者、市教委指導主事、学校の教師、民間支援団体スタッフ、大学の研究者や学生ボランティアが一堂に会する「外国人児童生徒支援のための地域連絡会(以下、「連絡会」)」が発足した(杉岡・兒玉, 2007)。筆者らは、この「連絡会」において、上述の調査報告や「教室」活動の経験を基に、ブラジル人の保護者を支援者ネットワークに加えることを提案し、「連絡会」としてその方法を模索することになった。2007年4月から市教委が文部科学省帰国・外国人児童生徒受入促進事業の指定を受け、数名のブラジル人保護者をバイリンガル相談員として採用することになった。そこで、彼女たちに「連絡会」に参加してもらい、「連絡会」が中心となり、ブラジル人保護者支援のための「ブラジル人保護者会(以下、「保護者会」)」を開催することになった。「保護者会」は、2007年7月から2か月に1回、多くのブラジル人親子や日本人支援者の参加を得て、定期的に開催された。

「保護者会」で、ブラジル人保護者と直接コミュニケーションの機会が増えると、彼らが実は子どもの教育に熱心で、子どもの教育のために来日した例もあることが明らかになった。その一方で、彼らは、日本人の教師や保護者との交流が少なく、日本の学校に関する知識が乏しく、学校教育に関与することができずにいた。また、日本語が不自由で子どもの勉強を見ることができず、子どもの学力や学校適応の実態を把握できていない親が多かった。ただし、「保護者会」に参加しているのは、地域のブラジル人保護者の一部であった。そこで、「連絡会」としては、地域のブラジル人保護者すべてを対象に、学校への関与、地域参加について調べ、ブラジル人保護者の子ども理解を促進するために、子どもの学校適応や学力、進路意識について調べることとなった。ところで、2005年調査では、ブラジル人の親子関係は日本人に比べて心理的距離が近いことや、親からの期待や関心が子どもの学校適応と関連することが見出された。しかし、ブラジル人の親子関係に関する調査研究は国内外に見当たらず、2005年調査の信頼性を検討するために、再度親子関係について調査することとした。また、2005年調査では、日伯比較により同じ地域に生活する者同士の異同を明

らかにし、日本人支援者とブラジル人双方から高い評価を得た。そこで、今回も地域に住むブラジル人親子の特徴を把握するため、同じ地域の日本人親子に同じ調査を行い、比較検討することとした。

なお、2005年調査では、学校適応を意識調査項目で明らかにしようとしたが、十分把握できなかった。そこで今回は、学力のパフォーマンス・テスト及び具体的な進路希望を尋ねる項目を加えた。また、「連絡会」や「保護者会」でのバイリンガルのブラジル人との議論を通して、質問紙のポルトガル語をより平易なものにするなどの改善も加えた。

これらの研究成果をふまえ、本研究では、ブラジル人児童生徒及び保護者への理解や支援を促進するため、ブラジル人の学校適応、親子関係及び地域参加について、前回調査に大幅な改善を加えて質問紙調査を行い、前回調査結果及び同地域に住む日本人親子対象の調査結果との比較を通し、それぞれの特徴と相互の関連を明らかにすることを目的とする。

方 法

調査対象者

調査対象者は、A県の小学5年生から中学3年生の子どもとその親であった。ブラジル人60組、日本人60組、合わせて660組を対象とした。

質問紙の構成

子ども用質問紙は以下の構成であった。(a)親子関係尺度①(20項目)：東・柏木・繁多・唐澤(2002)の親子関係診断検査(子ども用)のうち、“わたしを基本的に信頼してくれているのだと思う”など「被受容感」10項目、“わたしが家の外で何をしているのかを、とても知りたがる”など「心理的侵入」5項目、“わたしに、「勉強しなさい」としよっちゅう言う”など「達成要求」5項目の3下位尺度20項目に、“ぜんぜんあっていない”から“よくあっている”の5件法で回答してもらった。(b)親子関係尺度②(25項目)：Parker, Tupling, & Brown(1979)のParental Bonding Instrument(以下、PBI)とPBI日本語版(竹内・鈴木・北村, 1989)を参考に、簡単な日本語表現に改変したもの。“いつもやさしくはなしかけてくれる”など「情愛」12項目、“わたしをおやにたよらせようとする”など「過保護」13項目の2下位尺度25項目に、“ぜんぜんあっていない”から“よくあっている”の4件法で回答してもらった。(c)学校適応感(3項目)：独自に作成した、授業の理解度(“授業のときの先生の説明はどのくらい分かりますか”)、授業への興味関心(“学校の授業は楽しいですか”)、登校意欲(“学校に行きた

くないと思うことがありますか”)の3項目について、5件法で回答してもらった。(d)漢字能力(31項目)：小学校で習う漢字の読み問題(小1：犬, 草, 小2：父, 日曜日, 朝, 新聞, 小3：学校, 図書館, 童話, 屋根, 回転, 登場, 主人公, 場面, 小4：固く, 小5：税理士, 小6：存続)17項目と書き取り問題(小1：田, 川, 小2：姉, 明るい, 言う, 小3：昔, 平たい, 取り, 具, 倍, 深く, 小4：節分, 小5：富んで, 小6：姿勢)14項目の31項目に解答してもらった。(e)進路希望(1項目)：希望する進学先を“中学まで”, “高校まで”, “大学まで”, “大学院まで”, “その他”, “分からない”から選択式で回答してもらった。(f)地域参加(7項目)：日本人の友だちの数, ブラジル人の友だちの数, 習い事に通っているか, 「連絡会」主催の活動への参加など。(g)属性(8項目)：性別, 年齢, 学年, 滞日年数, 帰国意識など。親用質問紙は以下の構成であった。(a)親子関係尺度①(15項目)：東ら(2002)の親子関係診断検査(親用)のうち、“自分の果たせなかった夢を、子どもに託したい”など「達成要求」5項目、“子どもの要求や約束を、忘れることがある”など「無関心」5項目、“自分は、親として失格ではないかと思う”など「養育不安」5項目の3下位尺度15項目に、“まったくあてはまらない”から“よくあてはまる”の5件法で回答してもらった。(b)親子関係尺度②(25項目)：Parkerら(1979)のPBIとPBI日本語版(竹内ら, 1989)を参考に、子ども用の親子関係尺度②を親向けに表現にしたもの。“いつもやさしくはなしかけている”など「情愛」12項目、“子どもがやりたいことはだいたいやらせている”など「過保護」13項目の2下位尺度25項目に、“ぜんぜんあっていない”から“よくあっている”の4件法で回答してもらった。(c)学校教育への期待(8項目)：ベネッセ未来教育センター(2004)の「学校に期待する指導や取り組み」のうち、基礎学力, 受験学力, 郷土愛, 生活習慣, スポーツ, 芸術, コンピュータ技能, 性教育の8項目に、“ぜんぜん期待しない”から“とても期待する”の4件法で回答してもらった。(d)進路希望(1項目)：親が希望する子どもの進学先を“中学まで”, “高校まで”, “大学まで”, “大学院まで”, “その他”, “分からない”から選択式で回答してもらった。(e)地域参加(10項目)：親の学校教育参加の程度について, 「学校行事への参加」, 「配布物を見る」, 「配布物への返事を出す」の3項目に“ぜんぜんしない”から“よくする”の4件法で回答してもらった。地域参加の程度について, 「友だちの親との交流」, 「地域活動への参加」の2項目に、“ぜんぜんしない”から“よくする”の4件法で回答してもらった。その他, 日本

Table 1 調査時期別にみたブラジル人回答者の概要

| | 2005年 | | 2008年(本調査) | |
|-----------------|------------|------------|------------|------------|
| | 子ども | 親 | 子ども | 親 |
| 性別 | | | | |
| 男性(%) | 26名(45.6) | 18名(29.5) | 24名(53.3) | 8名(21.1) |
| 女性(%) | 31名(54.4) | 43名(70.5) | 20名(44.4) | 29名(76.3) |
| 不明(%) | | | 1名(2.2) | 1名(2.6) |
| 平均年齢(標準偏差) | 12.9歳(1.7) | 40.8歳(7.0) | 12.2歳(1.3) | 40.1歳(6.8) |
| 平均滞日年数(標準偏差) | 7.4年(3.9) | 10.2年(4.3) | 7.4年(3.9) | 12.1年(5.4) |
| 平均来日年齢(標準偏差) | 5.2歳(4.1) | | 4.4歳(4.7) | |
| 日本語会話能力(標準偏差) | | 3.1(0.9) | | 3.0(0.8) |
| 平均労働時間/日(標準偏差) | | 9.6(1.8) | | 8.5(1.3) |
| 回答言語(%) | | | | |
| 日本語 | 38名(63.3) | | 31名(70.5) | |
| ポルトガル語 | 22名(36.7) | | 10名(22.7) | |
| 帰国意識の内訳(%) | | | | |
| 日本 | 33名(60.0) | 38名(62.3) | 12名(28.6) | 6名(17.1) |
| ブラジル | 6名(10.9) | 9名(14.8) | 11名(26.2) | 14名(40.0) |
| 分からない | 16名(29.1) | 14名(23.0) | 19名(45.2) | 15名(42.9) |
| 5年後の居住予定地の内訳(%) | | | | |
| 日本 | | 29名(46.8) | | 12名(33.3) |
| ブラジル | | 10名(16.1) | | 12名(33.3) |
| 分からない | | 23名(37.1) | | 12名(33.3) |

人の親との交流、「連絡会」主催の活動への参加などを尋ねた。(f) 属性（9項目）：性別、年齢、滞日年数、帰国意識、5年後の居住予定地、日本語能力の自己評価、労働時間など。

調査手続き

無記名自記式の子ども用および親用質問紙を作成し、ポルトガル語に翻訳したポルトガル語版と総ルビ付きの日本語版を用意した。日本人親子には日本語版に回答してもらい、ブラジル人の子どもには日本語かポルトガル語のどちらか一方に回答してもらった。ブラジル人の親は、日本語の読み書きが困難であると考えられたため、ポルトガル語版に回答してもらった。調査時期は2008年12月から2009年1月であった。質問紙は、学校経由及び民間支援団体やボランティア経由で手渡し、あるいは郵送法で配布回収した。

結 果

回答者の概要

ブラジル人群の有効回答者数(有効回答率)は、子どもが45名(75.0%)、親が38名(63.3%)で、日本人群の有効回答者数(有効回答率)は、子どもが593名(98.8%)、親が533名(88.8%)であった。本調査(以下、2008年調査)のブラジル人親子の属性項目の内訳をTable 1に示し、比較のために2005年調査の結果も併記した。ブラジル人子どもの性別内訳は、男性が24名、女性が20名、不明が1名で、平均年齢は12.2歳($SD=1.3$)であった。平均滞日年数は7.4年($SD=3.9$)であり、平均来日

年齢は、4.4歳($SD=4.7$)であった。子どもの70.5%が日本語で回答した。

ブラジル人親の性別内訳は、男性が8名、女性が29名、不明が1名で、平均年齢は40.1歳($SD=6.8$)であった。平均滞日年数は12.1年($SD=5.4$)であった。日本語能力の自己評価は1点から4点の範囲で得点が高いほど自己評価が高く、その平均値は3.0点($SD=0.8$)であった。親の5年後の居住予定地は、「日本」が33.3%、「ブラジル」が33.3%、「未定」が33.3%であった。一日の平均労働時間は8.5時間($SD=1.3$)であった。2008年調査のブラジル人と2005年調査のブラジル人の親子の年齢、滞日期間、子どもの来日年齢、学年、親の日本語能力の自己評価、一日の平均労働時間の差を、 t 検定を用いて検討した。その結果、2008年調査のブラジル人の子どものほうが年齢が有意に低く($t(100)=2.12, p<.05$)、2008年調査のブラジル人の親のほうが労働時間が有意に短かった($t(71)=3.22, p<.01$)。子どもの来日年齢に有意差はなかったが、日本で生まれた子どもの割合は、2005年調査では13.6%だったのに対し、2008年調査では31.0%だった。同様に、親子の帰国意識及び親の5年後の居住予定地の比率を比較した。その結果、子どもの帰国意識で有意差があり($\chi^2(2)=9.96, p<.05$)、2008年調査のブラジル人の子どものほうが「日本に残る」の割合が低く、「ブラジルに帰る」の割合が高かった。親の帰国意識でも有意差があり($\chi^2(2)=18.73, p<.05$)、2008年調査のブラジル人の親のほうが、「日本に残る」の割合が低く、「ブラジルに帰る」と「まだ分からない」の割合が高かった。

Table 2 国別にみた親子関係、学校適応の平均値（標準偏差）

| | ブラジル人 | | 日本人 | | t値 ^a |
|--------------|-------|------------|-----|-------------|-----------------|
| | 人数 | 平均点 | 人数 | 平均点 | |
| 子どもからみた親子関係① | | | | | |
| 被受容感 | 44 | 3.98(0.95) | 592 | 3.80(0.78) | 1.42 |
| 心理的侵入 | 44 | 3.37(0.97) | 592 | 3.22(0.83) | 1.15 |
| 達成要求 | 44 | 3.77(0.97) | 592 | 3.21(0.89) | 4.05*** |
| 子どもからみた親子関係② | | | | | |
| 情愛 | 44 | 3.04(0.70) | 591 | 2.93(0.56) | 1.15 |
| 過保護 | 44 | 3.51(0.86) | 591 | 3.09(0.87) | 3.27*** |
| 親からみた親子関係① | | | | | |
| 達成要求 | 38 | 4.21(0.78) | 533 | 3.09(0.62) | 10.63*** |
| 親からみた親子関係② | | | | | |
| 情愛 | 38 | 3.40(0.45) | 528 | 3.05(0.38) | 3.45*** |
| 子どもの学校適応 | | | | | |
| 漢字読み正答数 | 44 | 9.64(5.75) | 593 | 16.30(1.78) | 7.66*** |
| 漢字書き正答数 | 44 | 6.52(4.54) | 593 | 12.20(1.88) | 8.24*** |
| 授業理解 | 44 | 1.83(1.24) | 591 | 1.95(0.86) | 1.40 |
| 興味関心 | 44 | 1.57(1.39) | 591 | 1.68(1.07) | 0.52 |
| 登校意欲 | 44 | 2.68(1.52) | 592 | 3.10(1.37) | 1.92 |

^a **: $p < .05$, ***: $p < .01$, ****: $p < .001$

日本人子どもの性別内訳は、男性が297名、女性が296名で、平均年齢は12.4歳 ($SD=1.5$) であった。日本人親の性別内訳は、男性が40名、女性が491名、不明が2名で、平均年齢は40.7歳 ($SD=4.8$) であった。一日の平均労働時間は6.8時間 ($SD=2.2$) であった。ブラジル人群と日本人群の平均労働時間の差を、 t 検定を用いて検討した。その結果、ブラジル人群の親のほうが労働時間が有意に長かった ($t(39) = 6.37, p < .001$)。

尺度の信頼性

親子の親子関係尺度の下位尺度について、クロンバックの α 係数を算出した。ブラジル人親の「養育不安」、「無関心」、「過保護」で $\alpha = .28 \sim .43$ と信頼性が低く、分析から除外した。その他の α 係数は、ブラジル人（日本人）で $.60 \sim .92$ ($.61 \sim .89$) だった。本来 $\alpha = .80$ 以上を分析対象とすることが望ましいが、尺度を日本人向けに標準化した際と同程度の信頼性が得られ、日伯比較が可能な $\alpha = .60$ 以上の下位尺度を分析対象とした。

親子関係

子どもからみた親子関係の特徴 子どもからみた親子関係の下位尺度の国別の平均値と標準偏差を Table 2 に示した。ブラジル人群と日本人群の子どもからみた親子関係尺度得点の平均値を比較したところ、ブラジル人群のほうが、「達成要求」($t(634) = 4.05, p < .001$)、「過保護」($t(633) = 3.27, p < .001$) が有意に高かった。すなわち、ブラジル人の子どものほうが、親が過干渉だという感覚が強く、親からの期待を強く感じていた。

子どもからみた親子関係では、2005年調査と2008年

調査に有意差はみられなかった。

親からみた親子関係の特徴 親からみた親子関係の下位尺度の国別の平均値と標準偏差を Table 2 に示した。ブラジル人群と日本人群の親からみた親子関係尺度得点の平均値を比較した。なお、「情愛」では等分散が仮定されなかったためウェルチの t 検定を用いた。その結果、ブラジル人群の親のほうが、「達成要求」($t(569) = 10.63, p < .001$)、「情愛」($t(41) = 4.69, p < .001$) が有意に高かった。すなわち、ブラジル人の親のほうが、愛情を持って子どもに接し、子どもへの期待が強いと考えていた。

親からみた親子関係では、2005年調査と2008年調査に有意差はみられなかった。

学校適応

漢字能力の特徴 漢字読みの正答数、漢字書きの正答数について、国別の平均値と標準偏差を Table 2 に示した。ブラジル人群と日本人群の正答数の平均値をウェルチの t 検定を用いて比較したところ、ブラジル人群のほうが、漢字読み ($t(44) = 7.66, p < .001$)、漢字書き ($t(44) = 8.24, p < .001$) とともに正答数が有意に少なかった。ブラジル人の漢字読みの正答率の内訳は、小学校1年生で習う漢字で78.5%、小学校2年生で習う漢字で73.9%、小学校3年生で習う漢字で54.0%、小学校4年生で習う漢字で40.9%だった。日本人の漢字読みの正答率の内訳は、小学校1年生で習う漢字で96.7%、小学校2年生で習う漢字で98.7%、小学校3年生で習う漢字で98.0%、小学校4年生で習う漢字で98.8%だった。すなわち、小学校5年生以上のブラジ

Table 3 国別にみた親の教育参加, 学校への期待, 地域参加の平均値 (標準偏差)

| | ブラジル人 | | 日本人 | | t値 ^a |
|------------|-------|------------|-----|------------|-----------------|
| | 人数 | 平均点 | 人数 | 平均点 | |
| 親の学校教育への参加 | | | | | |
| 学校行事への参加 | 38 | 1.55(1.08) | 530 | 2.44(0.63) | 5.01*** |
| 配布物を見る | 37 | 1.11(1.08) | 528 | 2.41(0.68) | 7.25*** |
| 配布物に返事を出す | 35 | 2.49(0.82) | 530 | 2.71(0.57) | 1.61 |
| 親の学校への期待 | | | | | |
| 基礎学力 | 36 | 3.53(0.88) | 532 | 3.56(0.57) | 0.32 |
| 受験学力 | 35 | 3.57(0.74) | 532 | 2.98(0.71) | 4.75*** |
| 郷土愛 | 35 | 3.77(0.65) | 531 | 2.90(0.71) | 7.11*** |
| 生活習慣 | 35 | 3.89(0.53) | 531 | 3.32(0.72) | 5.98*** |
| スポーツ | 35 | 3.86(0.36) | 532 | 3.13(0.65) | 10.92*** |
| 芸術 | 35 | 3.74(0.51) | 532 | 2.80(0.74) | 10.29*** |
| コンピュータ技能 | 35 | 3.89(0.32) | 532 | 2.96(0.73) | 14.73*** |
| 性教育 | 35 | 3.77(0.43) | 531 | 2.75(0.67) | 13.10*** |
| 親の地域参加 | | | | | |
| 友だちの親との交流 | 36 | 1.78(0.76) | 530 | 1.60(0.80) | 1.32 |
| 地域活動への参加 | 35 | 1.23(1.14) | 526 | 1.51(1.08) | 1.48 |

^a **:p <.05, ***:p <.01, ****:p <.001

ル人では、小4以降に習う漢字を読めない者が半数以上いた。ブラジル人の漢字書きの正答率の内訳は、小学校1年生で習う漢字で78.4%、小学校2年生で習う漢字で57.6%、小学校3年生で習う漢字で48.5%、小学校4年生で習う漢字で15.9%だった。日本人の漢字書きの正答率の内訳は、小学校1年生で習う漢字で99.3%、小学校2年生で習う漢字で96.6%、小学校3年生で習う漢字で94.0%、小学校4年生で習う漢字で78.8%だった。すなわち、小学校5年生以上のブラジル人では、小3以降に習う漢字を書けない者が半数以上いた。

学校適応感の特徴 「授業理解」, 「興味関心」, 「登校意欲」について、国別の平均値と標準偏差を Table 2 に示した。ブラジル人群と日本人群の学校適応感の平均値を比較したところ、有意差はみられなかった。1学期の欠席日数では、ブラジル人の子どもは、「0日(ぜんぜん休んでいない)」が25.6%、「1~29日」が62.8%、「30日以上」が11.6%だった。一方、日本人の子どもは「0日(ぜんぜん休んでいない)」が47.5%、「1~29日」が51.4%、「30日以上」が1.2%だった。両群の比率を比較したところ有意差があり、ブラジル人の子どものほうが「0日(ぜんぜん休んでいない)」の割合が低く、「30日以上」の割合が高かった ($\chi^2(2) = 28.23, p <.05$)。

ブラジル人の進路希望 「分からない」と「その他」と答えた者を除くと、ブラジル人(日本人)の子どもの進路希望は、「中学まで」が20.6%(1.6%)、「高校まで」が32.4%(40.1%)、「大学まで」が35.3%(54.1%)、「大学院まで」が11.8%(4.0%)だった。ブラジル人(日

本人)の親の進学希望は、「中学まで」が0%(0.2%)、「高校まで」が15.2%(35.3%)、「大学まで」が51.5%(62.7%)、「大学院まで」が33.3%(1.8%)だった。ブラジル人群と日本人群の子どもの進路希望の比率を比較したところ有意差があり、ブラジル人群の子どものほうが「中学まで」の割合が高かった ($\chi^2(3) = 48.24, p <.05$)。親の進路希望の比率を比較したところ、ブラジル人群の親のほうが「大学院まで」の割合が高かった ($\chi^2(3) = 81.81, p <.05$)。ブラジル人群の親子間の比較をしたところ、親のほうが「中学まで」の割合が低く、「大学院まで」の割合が高かった ($\chi^2(3) = 13.37, p <.05$)。すなわち、ブラジル人の親は日本人の親よりも高学歴志向で、大学院まで進学して欲しいと考えている者が多いが、子どもは中学までと考えている者が多かった。親子の進路希望と子どもの学校適応感の関連を検討するため、スピアマンの順位相関係数を算出した。その結果、子どもの進路希望と「授業理解」($r_s = .33, N = 34, p <.10$)及び「興味関心」($r_s = .30, N = 34, p <.10$)に有意傾向の正の相関がみられた。すなわち、授業に興味関心を持ち、授業を理解している子どもほど、高学歴志向だった。

ブラジル人の学校適応と親子関係との関連 ブラジル人の学校適応と親子関係がどのように関連するかを検討するため、漢字テストの正答数及び学校適応感と親子関係のピアソンの積率相関係数、欠席日数及び進路希望と親子関係のスピアマンの順位相関係数を算出した。その結果、被受容感と「授業理解」($r = .38, N = 44, p <.05$)及び「興味関心」($r = .43, N = 44, p <.01$)に有意な正の相関があった。心理的侵入と欠席日数に

有意な負の相関があり ($r_s = -.39$, $N = 43$, $p < .05$), 達成要求と進路希望に有意な正の相関があった ($r_s = .49$, $N = 34$, $p < .01$). すなわち, 親から受容されていると感じている子どもほど, 授業をよく理解し, 興味関心を持っていた。また, 親からの介入が強いと感じている子どもほど欠席日数が少なく, 親からの期待を強く感じている子どもほど高学歴志向だった。

地域参加

子どもの地域参加 子どもの地域のスポーツクラブに通っている割合, 塾に通っている割合について, ブラジル人群と日本人群を比較したところ, ブラジル人群のほうが, 塾に通っている割合が低かった ($\chi^2(1) = 27.56$, $p < .001$). 塾に通っているのは, ブラジル人群では16.3%, 日本人群では57.6%だった。

親の地域参加 親の学校教育参加と学校への期待の国別の平均値と標準偏差を Table 3に示した。ブラジル人群と日本人群の親の学校教育参加と学校への期待の平均値をウェルチの t 検定を用いて比較した。その結果, ブラジル人群の親のほうが, 「学校行事への参加」($t(38) = 5.01$, $p < .001$), 「配布物を見る」($t(38) = 7.25$, $p < .001$) が有意に低く, 学校への期待のうち, 「受験学力」($t(38) = 4.56$, $p < .001$), 「生活習慣」($t(43) = 5.98$, $p < .001$) など, 「基礎学力」を除く全ての期待が有意に高かった。すなわち, ブラジル人の親のほうが, 学校行事に参加する頻度および学校からの配布物を見る頻度が少なく, 学校への期待が強かった。親の「友だちの親との交流」, 「地域活動への参加」の国別の平均値と標準偏差を Table 3に示した。「友だちの親との交流」, 「地域活動への参加」では, ブラジル人群と日本人群に有意差はみられなかった。ブラジル人の親のうち, 「子どもや学校のことで日本人の親と交流することがある」と回答したのは33.3%だった。「子どもと日本人との付き合い」については, 「日本人とは付き合い合って欲しくない」が0%, 「日本人とは仲良くするように言う」が55.6%, 「特に何も言わない」が44.4%だった。

「連絡会」主催の活動への参加 回答したブラジル人の子どものうち, 「教室」に参加したことがあるのは47.1%, 学校で行われている「放課後クラブ」に参加したことがあるのは58.8%だった。ブラジル人の親のうち, 「保護者会」に参加したことがあるのは53.8%だった。

ブラジル人の学校適応と地域参加との関連 ブラジル人の学校適応と地域参加がどのように関連するかを検討するため, 学校適応と親の地域参加及び日本語能力の自己評価のピアソンの積率相関係数を算出した。その結果, 親の日本語能力の自己評価が高いほど, 子

もの漢字読み正答数が多かった ($r = .36$, $N = 33$, $p < .05$)。また親が子どもの友だちの親と交流する頻度が高いほど, 子どもの「授業理解」($r = .49$, $N = 33$, $p < .01$) 及び「興味関心」($r = .49$, $N = 33$, $p < .01$) が高く, 親が地域活動に参加する頻度が高いほど, 子どもの登校意欲が高かった ($r = .48$, $N = 32$, $p < .01$)。また, 「子どもや学校のことで日本人の親と交流することがある」と答えた親の子どもは, そうでない親の子どもに比べて, 漢字読み正答数が多かった ($t(31) = 2.53$, $p < .05$)。

考 察

回答したブラジル人親子の特徴

まず, 属性項目の結果を基に, 回答したブラジル人親子の集団がどのような特徴を持つかを明らかにし, コミュニティ心理学の観点から考察を試みる。

本調査の有効回答率は, ブラジル人の子どもは75.0%, 親は63.3%だった。同じブラジル人対象の濱田 (2005) の調査では有効回答率が26.8%で, 質問紙調査にブラジル人の協力が得られにくいことが指摘されているが, それと比較すると, 今回の対象となったブラジル人は調査に協力的だったといえる。2005年調査の有効回答率は, 子ども42.5%, 親43.2%で, それと比べても高かった。これは, 支援活動の主体である「連絡会」を経由して実施したためと考えられる。

親の平均滞日年数は12年で, 出稼ぎ目的の一時滞在としては長い。彼らのほとんどは, 一日8時間以上の単純労働に従事している。2005年調査と比べると労働時間は短くなっている。また, 帰国を志向する者が増えている。2008年秋以降の世界的な不況の影響と思われる。子どもの来日時の年齢は多様で, 小学校や中学校に途中の学年から入学する子どもも少なくない。途中入学の子どもは, 日本の学校に適応するのに苦労する。一方, 今回の対象となった子どもの31%が日本生まれだった。愛知県豊橋市で行われた調査 (新藤・岡田, 2008) でも子どもの35%が日本生まれだった。日本生まれの子どもは日本文化に同化し日本の学校に適応しやすい反面, ブラジルに帰国した場合の母国への適応が難しい。日本生まれの子どもを抱えたブラジル人家族は, 日本でも母国でも大きな困難を抱えることになる (Nakagawa, 2005)。

ブラジル人の親子関係の特徴

本研究では, 親子関係に関し2005年調査と同じ項目を使用した。その結果, 子どもからみた親子関係の下位尺度では, .70以上の信頼性係数が得られ, 2005年調査と2008年調査に有意差はなく, 信頼性が安定して

いた。一方、親からみた親子関係では、2005年調査と同様、日本人の親は尺度の標準化過程（東ら、2002）と同じかそれ以上の信頼性を示していたが、ブラジル人は「無関心」、「養育不安」、「過保護」で信頼性係数が低く、分析から除外することになった。親子で信頼性に違いがあったのは、子どものほとんどが日本語で回答しているのに対し、親はすべてポルトガル語で回答したことが関係しているとも考えられる。日本語で作成された親子関係尺度をいかに平易なポルトガル語に翻訳したとしても、このような限界があり、ポルトガル語版の尺度構成をする必要がある。

子どもからみた親子関係では、日本人に比べて、親が過保護であるという感覚が強く、親からの期待を強く感じていた。一方、親からみた親子関係では、日本人に比べて、子どもへの期待が強く、愛情を持って子どもに関わっていると感じていた。要するに、ブラジル人は親子の心理的距離が近く、親の期待や干渉を愛情表現と捉えているといえる。ところで、北米のヒスパニック系移民研究によると、母国の文化に拠って敬意や従順さを重視する親が、子どもが個人志向の文化に同化して自由に振舞うことを制限し、高い要求を示すことで、親子間の葛藤を生むという（Coatsworth et al., 2002）。今後、子どもからみて過保護で要求水準が高いという感覚が強まれば、親子間の葛藤が大きくなる可能性があり、この点に注目していく必要がある。

ブラジル人の学校適応の特徴

本研究では、漢字のパフォーマンス・テスト、欠席日数及び具体的な進路希望を学校適応の指標として用いたことにより、2005年調査に比べて、子ども達の困難をより具体的に把握できた。進路希望では、ブラジル人の親は、日本人の親に比べて高学歴志向で、ブラジル人の親の教育意識は高かった。ブラジルの日系人社会では、教育で身を立てる意識が強く（二宮、2004）、それが背景となっているのかもしれない。一方、日系南米人の子どもたちは、親次第でどこで生きるかわからない状況にあり、進路を選定するにあたってのモデルが欠如しているため、進学意識が低く、一時しのぎ的選択をしがちだという（宮島、2002）。本研究のブラジル人の子どもでも、20%が「中学まで」と回答するなど進路希望が低く、親の意識とのギャップが大きかった。進路希望と学校適応の関連では、高学歴志向の子どもほど、学校の授業に興味を持ち、授業を理解していた。学校の授業での良い体験が、子どもの進路意識を高める可能性がある。しかし、ブラジル人の子どもの半数以上が、小学4年生以降に習う漢字を読めず、小学3年生以降に習う漢字を書けなかった。また、ブラジル人は日本人に比べて欠席日数も多く、

ブラジル人の子どもの学校適応が良くなかった。特に日本語を第一言語とするブラジル人の子どもで、その習得が不十分な場合、思春期になると、思考言語の未熟さからアイデンティティのゆらぎが起こる可能性があり（坂田、2004）、より深刻である。

ブラジル人の学校適応と親子関係との関連

学校適応と親子関係の関連では、「心理的侵入」が高得点で親からの介入が強いと感じている子どもほど、欠席日数が少なかった。また、親からの期待を強く感じている子どもほど、高学歴志向だった。ニューカマーの家族では、親の将来展望の曖昧さが子どもの教育を受ける動機の低さに関連するという（宮島、2002）。親からの将来への期待を感じることで、子どもが教育を受ける動機をもてるようになっているのかもしれない。

ブラジル人では、親子の言語の壁や親の仕事の多忙さのために、親子間のコミュニケーションの齟齬が生じ、子どもが学校不適応に陥る可能性があり（二宮、2004）、家族関係の心地よさが子どものストレス症状軽減に影響するという（朝倉、2005）。2005年調査でこの知見は支持されていた。本研究でも、子どもが親との情緒的つながりを感じられることと授業理解や授業への興味関心が関連しており、親からの介入及び期待と親子の情緒的つながりの両方が、子どもの学校適応に関連していた。

ところで、本研究で用いた親子関係尺度では、「心理的侵入」や「達成要求」が高得点の場合、親の過干渉や高すぎる要求水準を表しているケースがあり、好ましくないとされる（東ら、2002）。親子の心理的距離の近いブラジル人では、干渉や期待の強さを親からの関心や愛情と受け取っている可能性もあるが、今後は「心理的侵入」や「達成要求」の内容について、事例検討を通して明らかにする必要がある。

ブラジル人の地域参加の特徴

子どもの地域参加では、地域のスポーツクラブに通っている割合に日伯差はなかった。学習塾に通っている割合は日本人が57.6%であるのに対し、ブラジル人は16.3%と低く、ブラジル人の8割以上は塾に通っていなかった。「連絡会」主催の無料の「教室」への参加経験も約5割で、ブラジル人は補助的な学習の場を利用していなかった。ブラジル人の親は、学校教育への期待は大きいですが、学校の行事への参加や配布物を見ることは少なかった。今回の調査では親が教育に参加しない理由を尋ねていないため詳細はわからないが、先行研究によると、日本語が分からず仕事が多忙であることや（田中、2004）、教育制度に不慣れであること（熊崎、2003）などが考えられる。

日本人との交流では、子どもと日本人との付き合いについては肯定的だったが、「子どもや学校のことで日本人と交流することがある」と回答した親は33.3%だった。ブラジル人が集住している群馬県大泉町では、ブラジル人の親の半数以上が子ども会やPTAに参加していた(新藤・岡田, 2008)。集住地域では、地域住民の受け入れ体制が整っており、ブラジル人が孤立しにくいのが、本研究の対象となった地域では、このような体制がまだ整っていないため日本人との交流が少ないと考えられる。

ブラジル人の学校適応と地域参加との関連

アジア系ニューカマーの子どもたちの学校適応を促進する家族の資源には、同国人及び日本人との親同士のネットワークと親の日本語能力があるという(志水・清水, 2001)。本研究でも、「子どもや学校のことで日本人の親と交流することがある」と回答した親や日本語能力の自己評価の高い親の子どもたちの漢字読みの正答数が多かった。また、親が地域活動に参加する頻度が高いほど子どもたちの登校意欲が高く、親が子どもたちの親と交流する頻度が高いほど、子どもたちの授業理解及び興味関心が高かった。

今後の課題

本研究では、2005年調査で信頼性の低かった親子関係尺度について、平易なポルトガル語を用いるなどの改善を加えたが、それでも十分な信頼性を得ることはできなかった。これは、日本人を対象に作成された尺度を翻訳使用することの限界であり、ポルトガル語版の親子関係尺度を作成する必要がある。さらに、ブラジル人の親が高い学歴を志向しながら、補助的な学習の場を利用しない理由や、教育に参加しない理由も、ブラジル人独特の教育観や学校観を踏まえながら明らかにしていく必要がある。

日本人支援者及びブラジル人保護者への提言

今回対象となった子どもは、7割が日本語の質問紙に回答しており、ポルトガル語よりも日本語を理解しやすく、日常会話レベルの日本語能力は備わっていると考えられる。しかし、学校適応の結果からは、子どもの低い日本語能力と学力達成及び進路希望の低さが明らかになった。米国では、移民の子どもたちの学力保障プログラムが充実している(Fuligni & Witkow, 2004)が、わが国では、外国人の子どもたちの学校適応を支援する体制は十分に整っていない。外国人の子どもたちの日本語能力の低さや学力達成の不十分さの原因を民族性に帰属して容認することなく、外国人の子ども特有の問題を認識し、それに即した学力保障の取り組みを実践していくことが望まれる(清水, 2006)。特に日常会話ができる子どもは、学校現場において「学習

思考言語」の未修得や文化的の差異が見過ごされがちで、学力不振の原因を怠けや知能などの個人的要因に帰属されやすいという(志水・清水, 2001)。ブラジル人の教育に関わる支援者には、教育現場での誤解をなくすよう配慮することが求められる。

また、ブラジル人の親は学校教育に参加していなかった。学校から親への伝達事項が確実に伝わるように、ポルトガル語のプリントを作るなど学校の体制を整備するとともに、ブラジル人の親が孤立しない地域づくりをしていくことが求められる。本研究の対象となった地域でも、「保護者会」やパーティーに自治会のメンバーを招待するなど、「連絡会」を中心にブラジル人受け入れ体制作りが始まっている。

一方、ブラジル人親子の側が、子どもの学校適応の現状を把握していないケースや、帰国を理由に日本の勉強や日本人との交流に意味がないと考えているケースもある。しかし、日本で学齢期を過ごしている子どもたちは、日本の学校教育を通して「学習思考言語」を獲得し、「考える力」を獲得している(熊崎・天野, 2007)。子どもたちの学校適応を促進するため、親が子どもたちの現状を把握し、親子が積極的に勉強や将来について話し合い、地域社会に参加していくことが望ましい。

【謝 辞】

本プロジェクト活動の初期からご協力ご支援いただいている呉市教育委員会学校教育課の江口修三係長(当時)とワールド・キッズ・ネットワークの伊藤美智代代表に感謝申し上げます。また、本調査にご協力いただいた日本人及びブラジル人の「連絡会」関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

【引用文献】

- 朝倉隆司 (2005). 日系ブラジル人児童生徒における日本での生活適応とストレス症状の関連—愛知県下2市の公立小・中学校における調査から—学校保健研究, 46, 628-647.
- 東洋・柏木恵子・繁多進・唐澤真弓 (2002). FDT 親子関係診断検査手引 日本文化科学社
- ベネッセ未来教育センター (2004). 学校教育に対する保護者の意識速報データ チャイルド・リサーチ・ネット 2004年4月
- <http://benesse.jp/berd/center/open/report/hogosya_ishiki/2004/pdf/isiki.pdf> 2008年10月29日
- Coatsworth, J. D., Pantin, H., & Szapocznik, J. (2002). Familias Unidas: A family-centered ecodevelopmental

- intervention to reduce risk for conduct problems and substance use among Hispanic adolescents. *Clinical Child and Family Psychology Review*, 5, 113-132.
- Dalton, J., Elias, M. J., & Wandersman, A. (2001). Community psychology: Linking individuals and communities. Stamford, CT.: Wadsworth.
- Fulgini, A. J., & Witkow, M. (2004). The postsecondary educational progress of youth from immigrant families. *Journal of Research on Adolescence*, 14, 159-183.
- 濱田国佑 (2005). 在日ブラジル人の定住化とその意識 北海道大学大学院教育学研究科紀要, 97, 225-239.
- 掛札 綾 (2004). 日系ブラジル人生徒のメンタルヘルスに関する研究—異文化要因の影響からみた学校生活適応におけるリスクファクターについて— こころと文化, 3, 67-71.
- 兒玉憲一・伊藤美智代・松岡亜紀夫・田村かすみ・杉岡正典・谷潤真也 (2006). 外国人の子どもたちを地域ぐるみで育てる 平成17年度広島大学地域貢献研究・研究成果報告書
- 兒玉憲一・倉地暁美・栗原慎二・島津明人・松下姫歌・杉岡正典・谷潤真也 (2007). 滞日日系ブラジル人児童生徒の教育・心理的支援に関する研究—非集住地域と集住地域の比較を中心に— 広島大学大学院教育学研究科・共同研究プロジェクト報告書, 5, 151-167.
- 熊崎さとみ (2003). 外国人の義務教育就学をめぐる諸問題—ブラジル人児童・生徒の場合— 信州大学留学生センター紀要, 4, 139-149.
- 熊崎さとみ・天野弥生 (2007). ブラジルへ帰った子ども達—日本での滞り・就学経験が帰国後に及ぼす影響と課題— 信州大学人文社会科学研究 1, 37-53.
- 箕口雅博 (2001). 異文化に生きる人々へのコミュニティ心理学的アプローチ—中国帰国者, 外国人留学生の場合を中心に— 山本和郎(編) 臨床心理学的地域援助の展開—コミュニティ心理学の実践と今日的課題— 培風館 pp.183-206.
- 宮坂リカーン (2000). 在日ブラジル人の現状と精神保健の課題 精神保健研究, 46, 73-78.
- 宮島 喬 (2002). 就学とその挫折における文化資本と動機づけの問題 宮島 喬・加納弘勝(編) 国際社会(2) 変容する日本社会と文化 東京大学出版会 pp.119-144.
- Nakagawa, K. Y. (2005). *Crianças e adolescentes Brasileiros no Japão províncias de Aichi e Shizuoka*. Unpublished doctoral dissertation, Pontificia Universidade Católica de São Paulo, São Paulo.
- 二宮正人 (2004). 在日ブラジル人児童の教育課題—「出稼ぎ」と学習権保障をめぐる 解放教育, 434, 46-56.
- Parker, G., Tupling, H., & Brown, L. B. (1979). A parental bonding instrument. *British Journal of Medical Psychiatry*, 52, 1-10.
- Riggs, N. R. (2006). After-school program attendance and the social development of rural Latino children of immigrant families. *Journal of Community Psychology*, 34, 75-87.
- 坂田麗子 (2004). セミリンガルの兆候のある JSL 児童生徒の特徴とその対応—I市にあるペルー人学校での日本語指導を通して— 年少者日本語教育年少者日本語教育実践研究, 3, 47-56.
- 関口知子 (2003). 在日日系ブラジル人の子どもたち—異文化間に育つ子どものアイデンティティ形成 明石書店
- 志水宏吉・清水陸美 (2001). ニューカマーと教育—学校文化とエスニシティの葛藤をめぐる 明石書店
- 清水陸美 (2006). ニューカマーの子どもたち—学校と家族の間の日常生活 頤草書房
- 新藤 慶・岡田朋子 (2008). 公立小中学校における日本人とブラジル人の相互関係と親の意識 『調査と社会理論』研究報告書, 25, 17-133.
- 杉岡正典 (2007). 滞日日系ブラジル人親子の進路意識と学校適応感との関連—地域間および学校間比較を中心に— 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部 (教育人間科学関連領域), 56, 263-272.
- 杉岡正典・兒玉憲一 (2005). 滞日日系ブラジル人の抑うつ症状と文化的所属感およびサポート・ネットワークの関連 コミュニティ心理学研究, 9, 1-13.
- 杉岡正典・兒玉憲一 (2007). 滞日日系ブラジル人児童生徒支援のための支援者ネットワークの試み コミュニティ心理学研究, 11, 76-89.
- 竹内美香・鈴木忠治・北村俊則 (1989). 両親の養育態度に関する因子分析的研究 周産期医療, 19, 852-856.
- 田中ネリ (2004). 在日ラテンアメリカ人の子ども—その背景と支援 異文化間教育, 20, 29-39.
- 谷潤真也・杉岡正典・兒玉憲一 (投稿中). 滞日日系ブラジル人親子の親子関係と学校適応感及び進路意識との関連 コミュニティ心理学研究.